

J. コルナイの体制移行論の検討

福 田 敏 浩

I はじめに

ハンガリーの経済学者ヤーノシュ・コルナイ (János Kornai) は社会主義研究の第一人者である。かれは1950年代からソ連型社会主義の研究に従事し、強行的成長(forced growth)、不足経済(shortage economy)、ソフトな予算制約(soft budget constraint)、投資渴望(investment hunger)などのユニークなコンセプトを次々に打ち出してソ連型社会主義の体制特質を余すところなく描き出した。

1960年代末のハンガリーで市場社会主義を志向した経済改革が始まると、コルナイの関心はその効果分析に向けられた。この国では市場経済を導入して官僚的調整につきものの低効率を克服することが試みられたのだが、それに対するコルナイの評価はネガティブであった。つまり、市場経済を導入しても国有制が温存されたために企業のソフトな予算制約や企業に対する官僚的干渉などは克服されず、経済改革は総じて不調に終わったというのがコルナイの下した¹⁾結論であった。

東欧革命以後におけるコルナイの研究は二つに大別される。「完結した歴史の一章になってしまった」²⁾現存社会主義に関する総括的研究と、ポスト社会主義における移行経済に関する研究である。もっとも両者は密接に関連しており、前者をベースにして後者が展開されるという形をとっている。

本稿ではこのようなコルナイの現存社会主義の総括的研究と移行経済論を取り上げ、筆者の「所有、相互・上下調整の三元論」の立場から批評を試みてみたい。

1) コルナイ [14] pp.61-119

2) Kornai[16]pp.391-392

なお、以下のコルナイ説の紹介はコルナイの叙述をそのままコピーしたものではなく、筆者の関心に即して解釈を加え、筆者なりのストーリーに仕立て直したものであることをあらかじめ断っておく。

Ⅱ 政治・所有・調整の三元論

1. 政治経済学的アプローチ

東欧革命以後におけるコルナイ説の顕著な変化はアプローチ方法に見られる。東欧革命以前におけるコルナイの研究関心は現存社会主義——コルナイの用語では古典的社会主義(classical socialism)と改革社会主義(reform socialism)——に向けられ、その個性把握の方法として新古典派経済学のミクロ理論が採用されていた。たとえば、コルナイ説のキー・ワードであるソフトな予算制約は、ミクロ理論という私的家計の予算制約の考えを国有企業に応用したものであった。ところが東欧革命以後になると、コルナイは政治的ファクターを最重視するようになる。もっともそれまでも政治的ファクターは考慮外に置かれていたのではないが、その扱いは副次的であり後列に置かれていた。それが一挙に最前列に出てきたのである。共産党独裁の崩壊という政治的大事件がコルナイの方法的スタンスに決定的な変更を迫ったことは想像に難くない。

こうしてコルナイは「政治は経済の外にあるのではなく、経済における主要な内生的ファクターのひとつである。これが実証的政治経済学の公理的な出発点である³⁾」という立場をとるようになる。実証的政治経済学(positive political economy)の立場宣言である。「実証的」にはポパー(K. Popper)流の実証主義の立場に立ち、現存の社会主義つまりソ連・東欧諸国に制度化された現実の社会主義を論じるという意味が込められている⁴⁾。

2. 古典的社会主義の仕組み

コルナイは1992年に『*The Socialist System: The Political Economy of Communism*』という紙数672ページにも及ぶ大作を世に問うた。この書はおよそ40年にわたる

3) Kornai[19]p. 169

4) Kornai[16]p. 376, Kornai[20]p. 28

古典的社会主義研究を実証的政治経済学の立場から総集成したものである。この書の中でコルナイは、古典的社会主義の登場からその崩壊までを視野に収めつつ、その展開過程を時間軸に即して手際よく叙述し、不足シンドローム (shortage syndrome) を軸にして古典的社会主義の欠陥を抉り出し、その崩壊の原因を確定し、最後に資本主義への転換を論じている。本書は数多ある社会主義論の中でも出色の出来ばえを誇っており、間違いなく必見の古典になるだろう。

ここではまず最初に本書と、それを補完するコルナイの最新論文 *"What the Change of System From Socialism to Capitalism Does and Does Not Mean"* (in, *Journal of Economic Perspectives*, Winter, 2000) において論じられている古典的社会主義の基本的仕組みに的を絞り、経済体制論の角度からその個性を描き出してみることしよう。

コルナイによればソ連起源の古典的社会主義は戦時方式を平時に転用した動員経済 (mobilization economy) の性質をもつ⁵⁾。その古典的社会主義の柱をなすもつとも根本的な構成要素は権力構造である。つまり「マルクス・レーニン主義政党の不可分の権力」⁶⁾構造である。そのほかにコルナイは生産手段の国有と需給の官僚的調整を基本的構成要素として挙げている⁷⁾。

このように権力の党集中、国有および官僚的調整の組み合わせを古典的社会主義の基本構造と見るところにコルナイ説の特徴がある。「政治・所有・調整の三元論」と言えようが、ただ同様の説は他の幾人かの論者によっても唱えられていることに注意しておかねばならない。たとえば、ユーゴスラヴィアの新マルクス主義者ホルバート (B. Horvat) は、コルナイに先立って、ソ連型社会主義を政治権力の集中、生産手段の国有および行政的計画の組み合わせと捉えているのである⁸⁾。

といってコルナイ説にユニークさが無いというのではない。三つの基本的構成要素の関連ということになるとコルナイ説は俄然光彩を帯びてくる。三者の

5) Kornai [16] p. 182

6) Kornai [16] p. 361, Kornai [20] p. 29

7) Kornai [16] p. 361, Kornai [20] p. 29

8) Horvat [11] p. 233, Horvat [12] p. 188

関係が因果連鎖 (causal chain) と有機的発展 (organic development) のコンセプトをもって説明されているからである。立ち入ってみよう。

コルナイによれば古典的社会主義が登場し定着するには一定の条件が必要である。コルナイはこの条件として遺伝子プログラム⁹⁾ (genetic program) を挙げ、古典的社会主義の発生および発展を生物学的に把握しようとする。植物は種子から発芽し成長するが、それと同様に古典的社会主義も特定の遺伝子プログラムを内包する種子¹⁰⁾ (the seed of the genetic program) から生まれ成長する。遺伝子プログラムが具体的に何を意味するかは説明がないので判然としないが、解釈するとマルクス・レーニン・スターリン主義の社会主義プログラムなのであろう。それを内包する種子とは何か。これはコルナイによって明言されている。マルクス・レーニン主義政党つまり共産党と、その公式のイデオロギーつまりスターリン主義である。ロシア革命によって権力を独占した共産党は上から一方的に遺伝子プログラムを社会に押しつけたが、そうすると「遺伝子プログラムはそれ自身のイメージで社会を形成していく。そしてそのさまざまな要素が互いに結びつき、互いに引きつけ合い、互いに補強しあう、凝集力のある一貫したシステムを生み出していく」¹²⁾。

具体的に言うところなる。共産党が登場してスターリン主義を採るとそれが望ましいと考える所有方式、つまり国有を登場させる¹³⁾。共産党独裁と国有は今度は市場的調整を生み出す¹⁴⁾。ここに共産党独裁→国有→官僚的調整という因果連鎖が成立する。この因果連鎖は機械的結合ではなく有機的結合である。したがって古典的社会主義は有機的システム (organic system) ということになる。

もっともこのような因果連鎖が成立し古典的社会主義が完成するまでには有機的発展という時間的プロセスがある。コルナイを引用するところである。「社会主義の『遺伝子プログラム』が生きた社会の有機体に植えつけられると、

9) Kornai[16]p. 375, Kornai[20]p. 31

10) Kornai[16]p. 375

11) Kornai[16]p. 375

12) Kornai[16]p. 375

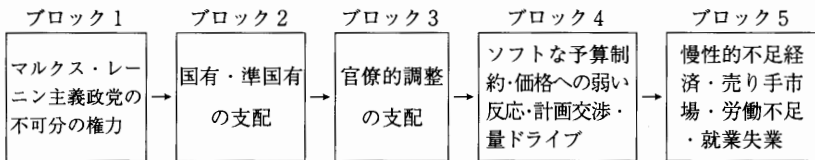
13) Kornai[16]p. 362

14) Kornai[16]p. 363

その中で自発的諸力が働き始める。システムは自らを完成しようとし、それ自身と両立しえない制度や組織を拒絶する¹⁵⁾、「制度や行動パターンの自然淘汰がなされると、システムの内的凝集力は著しく高まり強固になる¹⁶⁾」。

コルナイは以上を要約する形で次のような図を書いている。¹⁷⁾

図1 古典的社会主義



図中の矢印は因果関係を示す。ブロック1, 2, 3は古典的社会主義の基本的構成要素である。ブロック4と5は古典的社会主義の現象面を表している。つまり古典的社会主義の表面に現れるシステム固有の経済現象である。

ブロックの1から5は深度(depth)をも表している。つまり古典的社会主義の最深部から表層面までのオーダーリングである。ブロック1が古典的社会主義の最深部に位置する土台であり、その上にブロック2があり、ブロック3がその上にあり、さらにブロック4がその上にあり、ブロック5が最上層にあるという構造である。このことから明らかなように、コルナイはマルクス(K. Marx)とは逆にいわゆる上部構造(政治)が下部構造(経済)を決定すると見ている。この意味でコルナイ説は政治決定論であると言える。

Ⅲ 現存社会主義はなぜ崩壊したか

以上のように古典的社会主義は因果連鎖の形で結びついた凝集力ある一貫したシステム(coherent system)であり、しかも内部に矛盾対立を含まないので安定的なシステムである。コルナイはこれらの意味を込めて古典的社会主義を

15) Kornai[20]p. 31

16) Kornai[16]p. 368

17) Kornai[16]p. 361, Kornai[20]p. 29

「強い連結」(strong linkage)と呼んだ。¹⁸⁾

ではなぜ強い連結を誇った古典的社会主義は崩壊したのか。古典的社会主義の凝集性には強さと同時に弱さが含まれており、とくに機能面でその弱さが露呈したためだというのがコルナイの解答であった。¹⁹⁾ 共産党独裁・国有・官僚的調整の組み合わせから機能面では図1のブロック4に示すようなソフトな予算制約、価格への弱い反応、企業と当局との間の計画交渉（割り当て額をめぐる交渉）、量ドライブ（量至上主義の行動）などのシステム固有の現象が現れた。その結果、ブロック5に示すような財および労働の慢性的不足、就業失業（つまり隠された失業）、さらには技術面および消費面での立ち遅れ、浪費などの機能障害が生じた。これらの障害が累積した結果、古典的社会主義は機能不全に陥った。

ソ連・東欧諸国は一連の経済改革を実施してこのような難局を乗り切ろうとしたが、コルナイによれば経済改革はかえって事態を深刻にしたという。²⁰⁾ ソ連・東欧の経済改革は主として図1のブロック3およびブロック4を対象にし、官僚的統制の緩和化（つまり分権化）をめざしたが、そのことによってシステムの凝集力が低下し、システム全体の安定性に揺らぎが生じた。コルナイはハンガリーがその典型であると見た。

ハンガリーは市場社会主義をめざした。図1で言えばブロック1およびブロック2はそのままにしておいてブロック3を官僚的調整から市場的調整に切り替えることを試みた。つまり共産党独裁、国有および市場的調整の組み合わせを実現しようとした。ハンガリーの改革者たちは市場を導入しさえすれば「国有企業があたかも市場アクターとして行動すると信じてきた」。²¹⁾ところが現実はそのうはならず、機能上の旧弊の多くは解決されなかった。なぜか。コルナイは、その究極の原因は国有に市場的調整を組み合わせたことにあった、と見た。それはいわば「火と水を混ぜ合わせる試み」²²⁾であり、本来両立しえないものを組み

18) Kornai[15]p. 45

19) Kornai[16]p. 383

20) Kornai[16]p. xxv, pp. 571, 572, 573

21) Bossanyi[2]p. 317

22) Kornai[18]p. viii

合わせたのである。コルナイはこのような意味をこめて両者の組み合わせを「弱い連結」(weak linkage)²³⁾と呼んだ。こうして市場社会主義は凝集性および安定性の面で古典的社会主義よりも一段と劣るものにならざるをえなかった。ハンガリーが資本主義への移行を余儀なくされたゆえんである。市場社会主義は1980年代前半のポーランドおよび1980年代後半のソ連においても導入されたが、弱い連結のゆえに両国の経済に混乱をもたらし、システム革命を誘発する原因となった。

現存社会主義の崩壊の原因は以上のとおり経済的困難であるが、コルナイはそのほか公衆の不満（低い生活水準・低品質・製品の選択幅の狭さ・サービスセクターの立ち遅れ・環境破壊などに対する不満）、権力者に対する信頼の喪失および外国の情勢変化を挙げている。²⁴⁾

IV 移行経済論

1. 社会主義から資本主義へ

コルナイは、東欧革命以後の旧ソ連・東欧諸国における体制変動を革命と捉えた。コルナイの言う革命は図1のブロック1の根本的变化を意味する。²⁵⁾東欧革命は共産党独裁を崩壊させ、したがって社会主義の土台を崩壊させたのだからまさしく革命であった。こうして旧ソ連・東欧諸国は「資本主義的市場経済へ向かった」。²⁶⁾

コルナイには資本主義の仕組みに関する詳しい説明はない。筆者の知る限りでは上述の古典的社会主義の図1に対比させる形で下記のような資本主義の仕組みが図示されているだけである。この図は2000年の最新論文に登場したものである。²⁷⁾

23) Kornai[15]p. 45

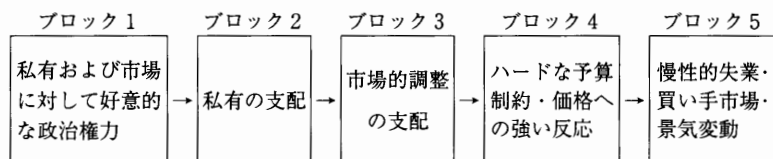
24) Kornai[16]pp. 383-386

25) Kornai[16]pp. 388, 390

26) Kornai[16]p. 389

27) Kornai[20]p. 29

図2 資本主義



矢印は因果関係を示す。ブロック1, 2, 3は資本主義の基本的構成要素である。ブロック4と5は資本主義の現象面を表している。ブロック1から5までは資本主義の最深部から表層までの深度を示している。資本主義も社会主義と同様に有機的システムである。資本主義の土台を成すのは「私有および市場に対して好意的な政治権力」であるが、政治形態の面から見ると、いわゆる民主主義も独裁もこれに含まれる。独裁についてコルナイがイメージしているのは戦後²⁸⁾数十年間の韓国と台湾、今日のシンガポールである。

体制移行に関するコルナイの研究は内容的に二つに分類できる。移行戦略と移行経済の現状分析である。順に見てみよう。

2. 移行戦略論

筆者はコルナイの移行戦略論についてはこれまでたびたび言及し、また詳しく²⁹⁾検討してきたのでここではその要点だけを指摘するに止めたい。コルナイは資本主義への移行にあたって旧ソ連・東欧各国政府が採るべき戦略についてグラデュアリズムを提唱した。一口で言うところ資本主義への移行は市場経済の有機的发展に委ねよというものであった。この立場からすると国有企業の私有化は国家の上からの方法ではなく、下からの方法、つまり市場経済の制度化とともに登場する新しい私的セクターとの競争・淘汰に委ねよということになる。このようなコルナイの戦略論の背後には、資本主義は設計された体制ではなく有機的に成長した自生的なものであるという考えがある。筆者のラディカリズム

28) Kornai[20]p. 37

29) 詳しくは次の文献を参照されたい。福田[4], 福田[5], 福田[6], 福田[8]

の立場からすればコルナイ説はハイエク (F.A.v. Hayek) の資本主義観に呪縛された非現実的な机上の戦略論である。³⁰⁾

3. 移行経済の現状分析

コルナイは主としてハンガリーを対象にして移行経済の現状について発言してきた。具体的に言うと、この国のマクロ経済事情を定量的に分析したり、政府の経済政策を論評したり、移行を促進する政策案を提示したりしてきた。また、彼はこの国の体制移行の進捗状況を分析してきた。この分析にはコルナイ説の個性がよく出ている。立ち入ってみよう。

ハンガリーの体制移行はどの地点まで進んだか。これがコルナイの問題意識であるが、この問いに答えるにさいして彼が目にしたのは上に示した図1のブロック5である。これは社会主義の表面に現れるシステム固有の現象であるが、その中でコルナイが分析指標として選んだのは慢性的不足である。慢性的不足の原因は、企業の生産がインプット財および労働力などの調達困難のゆえに攪乱されたり、遅れたり、ダメージを受けたりすることにある。コルナイはこのような意味を込めて古典的社会主義を供給制約システム (supply-constrained system) と呼んだ。³¹⁾ 資本主義はこれとは丁度逆になる。企業の生産の能力はインプット財や労働力の調達が比較的容易なために高まるが、反面買い手からの注文が不足したりセールスが困難であるために生産は過剰となる。このような意味で資本主義は需要制約システム³²⁾ (demand-constrained system) であり、財や労働力の過剰が常態化する過剰経済 (economy of surplus)³³⁾ である。

体制移行は図1および図2のブロック5のレベルで言えば慢性的不足経済から過剰経済への移行である。したがって体制移行の進捗状況を捉えるにはハンガリーで慢性的不足がどの程度解消されたかを見ればよいことになる。コルナイは自動車、エレクトロニクス、電気通信、情報テクノロジー、住宅などの代表的品目を取り上げ、その一つひとつについて不足解消の程度を調べている。こ

30) 詳しくは次の箇所を参照されたい。福田 [8] p. 80

31) Kornai [19] pp. 3, 4

32) Kornai [19] pp. 3, 4

33) Kornai [19] p. 38

ここでは自動車についての調査結果のみを紹介しておこう。³⁴⁾

	行列なしに販売 された新車(%)	行列後に販売 された新車(%)	待機年数
1985年	24.4	75.6	1.9
1986年	22.5	77.5	2.0
1987年	24.5	75.6	1.9
1988年	23.2	76.8	2.3
1989年	42.7	57.3	2.9
1990年	52.3	47.7	2.3
1991年	93.8	6.2	1.2
1992年	100.0	0.0	—

コルナイはこのような調査を踏まえて次のような結論を導き出している。
「1992年ごろからハンガリー経済はもはや慢性的不足経済とは言えなくなっ
た」³⁵⁾、「ハンガリー経済は市場経済になったと言える。市場メカニズムはなお多
くの摩擦を伴いながら作動しているものの、それはすでに特有の調整システム
になっている」³⁶⁾。ハンガリー経済は1992年ごろから慢性的不足経済ではなくな
り、市場経済へ移行したというのである。市場経済への移行は図1のブロック3
のレベルでの移行である。

慢性的不足の解消をもたらした原因としてコルナイは次のものを挙げてい
る。³⁷⁾①私有化、②市場参入の自由化、③輸入の自由化、④価格の自由化、⑤企
業の予算制約のハード化、⑥投資渴望の消滅。①は図1のブロック2での移行
措置であり、②③④はブロック3での移行措置であり、⑤と⑥はブロック4で
生じた現象であると言えよう。

34) Kornai[19]p.7. 原表の一部を省略した。

35) Kornai[19]p.33

36) Kornai[19]p.34

37) Kornai[19]pp.11, 13, 14, 33, 154

コルナイは以上の体制移行分析で何を言いたかったのであろうか。確かなことは市場経済が機能し始めて慢性的の不足が解消されたことである。つまり図1のブロック3のレベルでの移行が完了したことである。問題はこれをもってハンガリー経済は資本主義への移行を完了したと言えるかであるが、コルナイはそこまでは考えていないようである。ひとつには彼はハンガリー経済は過剰経済になったとも、需要制約システムになったとも言っていないからであり、ふたつには図1のブロック2のレベル、つまり所有レベルでの移行が完了し私有が支配的になったとは述べていないからである。コルナイ説では私有の支配は資本主義の三本柱の一つである。

コルナイの論法に即して整理すると、ハンガリー経済は資本主義の近傍に到達してはいるが、今のところ(1990年代半ば)はまだ移行経済の段階にあるというのがコルナイのさしあたりの結論であるように思われる。

V コルナイ説の批評

次に、以上に見たコルナイ説のうちその基幹部分を成す古典的社会主義の仕組み、移行戦略論および移行経済の現状分析の三点について検討しておこう。

1. 古典的社会主義の仕組みについて

コルナイの経済体制論は生物学的である。遺伝子プログラム、種子、有機的發展、自然淘汰、自発的生成などのタームがそれを象徴している。もっともコルナイが生物学的スタンスを前面に押し出すようになるのは東欧革命後のことである。コルナイは現在流行しているハイエクやノース(D.C.North)やマーレル(P.Murrell)らの進化経済学のパラダイムをすばやく取り入れたのである。

ついでに言っておくと、東欧革命以前の³⁸⁾コルナイは、市場社会主義の「改革理念の確固たる支持者」と自称したように、市場社会主義者であった。その当時のコルナイは、他の市場社会主義者と同様に、マルクス経済学を放棄して新古典派のパラダイムを受け入れ、経済体制の設計は可能と考える設計主義の立場をとっていた。その彼も東欧革命後は設計主義の立場を放棄してハイエク流

38) コルナイ [14]p.2

の自然生成主義（資本主義は設計によって制度化されたのではなく自発的かつ有機的に発展してきたとする説）を採るに至った。市場社会主義者からハイエキアンへの転向である。

古典的社会主義は強い連結である。コルナイは、その基本的構成要素である共産党独裁、国有および官僚的調整はひとつの遺伝子プログラムから生み出されたものであり、したがってそれらは有機的因果連鎖で強固に結びつけられている、と考えた。これに対し市場社会主義は弱い連結である。その基本的構成要素は共産党独裁、国有および市場的調整であるが、それらのうち国有と市場的調整は矛盾対立するので市場社会主義は凝集力が低く、かつ不安定であると考えられた。

筆者が問題にしたいのは強い連結および弱い連結とは何かということである。どういう意味での連結なのか。筆者の考えでは構成諸要素の連結は二つの面から考察しなければならない。機能連関と意味連関である。³⁹⁾コルナイ説ではこのような区別は意識されていない。どちらの意味が込められているか判然としなが、あえて推理すると、意味連関の方がより意識されているように思われる。コルナイは強い連結を論じるさいにスターリン主義に触れているが、このイデオロギーの核心は国家主義であり、したがってそれから生み出された上述の三つの構成要素は国家主義で貫かれ、意味的に一貫していることになる。これに対し弱い連結の方は意味的に対立する。国有の背後にある国家主義と市場的調整の背後にある個人主義は意味的に矛盾するからである。

筆者はかねてより、経済体制の構成諸要素の関連は意味連関と機能連関の両面から考察すべきであると主張してきた。⁴⁰⁾このような考えに立つと、古典的社会主義および市場社会主義の体制特質は少なくともコルナイ説以上に的確に把握できるようになる。古典的社会主義(筆者の用語では管理社会主義)は意味的には強い連結であるが、機能的には弱い連結である。筆者の説では古典的社会主義は基本的に国有、中央管理経済および指令の組み合わせから成る。これは国家

39) 詳しくは次の文献を参照されたい。福田[7]、福田[10]

40) 次の文献を参照されたい。福田[7]、福田[10]

主義のイデオロギーで貫かれているので意味的に一貫した強い連結である。他方、機能連関の面から見るとこの組み合わせは最悪であった。国有は企業の予算制約をソフトにし、中央管理経済は需給のアンバランス(不足経済)を招き、指令は企業にレント・シーキングの行動をとらせ、量至上主義を強要して低品質とイノベーションの停滞をもたらしたのである。したがって機能的には弱い連結であった。

一方、ハンガリー型市場社会主義は「意味的にも機能的にも弱い連結」であった。この市場社会主義は基本的に国有、市場経済および誘導の組み合わせから構成されたが、国有は国家主義の世界であるのに対し市場経済と誘導は個人主義の世界であるのでこの組み合わせは意味的に対立した弱い連結である。また機能的に見ると「国有のブレーキ効果」⁴¹⁾のゆえに市場経済は機能不全に陥った。ゆえにこの組み合わせは機能的にも弱い結合であった。

体制の安定性の観点から見ると、古典的社会主義は意味的には安定していたが、機能的には不安定であった。それゆえに古典的社会主義は絶えず機能面での改革に追われたのだが、改革が意味連関に固執して体制内のマイナーチェンジに終始したために倒壊を余儀なくされたのである。市場社会主義は意味的にも機能的にも不安定であったがために、その存続期間は比較的短かいものにならざるをえなかった。

2. 移行戦略論について

上述したようにコルナイの移行戦略論はグラデュアリズムである。資本主義への移行は、政府主導のビッグバンではなく、システムの有機的發展に委ねるべきである、という考えである。その背後には資本主義の基本構成に関する図2の論理がある。その論理に即して説明すると次のようになろう(コルナイにこのような説明はない)。東欧革命は共産党独裁を崩壊せしめ、非共産党政権を登場させた。この政権は資本主義イデオロギーを奉じているのでその遺伝子プログラムの種子の役割を演じることになる。この種子が東欧各国に植え付けられると、資本主義がその遺伝子プログラムに即して生成してゆく。つまり、時間の

41) 次の箇所を参照されたい。福田[3]第3章, pp.90-93

経過とともに私有と市場的調整が円現し、やがて有機的な因果連鎖を形作るようになる。コルナイの論理からすればこのような説明になるはずである。ハイエク流の資本主義観も背後にあることは前述のとおりである。

コルナイはまた、資本主義の担い手である企業家やブルジョアが不足している現状ではグラデュアリズムを採らざるをえない、と考⁽⁴²⁾えている。

筆者はかねてよりコルナイの戦略論に批判を加えてきた。その要点は次の三つ⁽⁴³⁾である。第一はコルナイの戦略論はポスト社会主義各国の初期条件を無視したものであること、第二はコルナイの言うように私的セクターの育成をシステムの有機的発展に委ねると、各国の基幹産業分野で支配している大量の国有企業群の私有化が遅れ、資本主義への移行のブレーキとなること、第三は中欧各国のように「ヨーロッパに帰る」をスローガンにしてEUの資本主義をめざした移行政策を実施している国ではグラデュアリズムを採る必要はないこと、むしろラディカリズムの方がはるかに有効であること、である。

コルナイ説に対する批判をもう一点付け加えておきたい。コルナイは企業家やブルジョアの育成に時間がかかるからグラデュアリズムを採らざるをえないと考⁽⁴⁴⁾えているが、そうだろうか。コルナイの考えの背後には新制度派の経路依存(path dependence)の考えがある。国有企業のマネジャーは社会主義時代のゲームのルールの中で長年行動したから環境が変わっても容易にその行動を変えようとしな⁽⁴⁴⁾いという考えである。果たしてそうか。最近アロー(K.J.Arrow)は体制移行を論じた論稿の中で「期待依存」(expectation dependence)という魅力あるコンセプトを提示した。ミクロレベルのアクターの行動は経路依存の面ばかりでなく期待依存の面からも見るべきであると言うのである。

期待依存の考えを採るとグラデュアリズムは主張できなくなる。アクターは将来のゲームがこうなるであろうという期待をもって行動する。したがってアクターが制度的条件やゲームのルールが急激に変わらないと期待すると、かれらは経路依存の行動をとる。逆にアクターはそれらがいわば革命的に変化する

42) Kornai[17]p. 38, Kornai[18]p. 87

43) 次の箇所を参照されたい。福田 [8] 第4章, pp. 91-100

44) Arrow[1]p. 18

と期待すると、そうした環境変化に即応した行動を採ろうとする。こうであるならば、ケレン(M. Keren)の言うように、⁴⁵⁾ マクロレベルはもとよりミクロレベルでもビッグバンを行い、アクター(つまり旧国有企業のマネジャー)をしていわゆる企業家や経営者の行動をとらせるようにすることが可能となる。具体的には私有化、市場参入の自由化、マーケット・ルールの制定、予算制約のハード化などの政策を一挙に行うと、期待依存の法則にしたがってアクターの行動は比較的短期間にプロフィット・シーキング的になりうるのである。

3. 移行経済の現状分析について

コルナイは体制移行について次のように述べている。「移行はいつ始まり、いつ終わるのか。移行プロセスは社会が[上述の図1の]ブロック1・2・3に示した社会主義の基本的特徴から離れるときに始まり、資本主義を特徴づける[上述の図2の]⁴⁶⁾ブロック1・2・3の集合に到達するときに終わる」。コルナイの関心は体制移行の始点と終点にある。つまり移行経済の存続期間にある。ところが、上述のようにコルナイの移行経済の現状分析はハンガリーに限定され、しかもこの国の体制移行は需給の調整レベルで完了したこと、つまり官僚的調整から市場的調整に移行したことを論証しえなすぎなかった。

コルナイには複数のポスト社会主義国をカバーする現状分析はないし、また移行経済に関する動的分析も経済体制論的分析もない。つまり、時間軸に即しつつ移行経済の運動を把握することも、移行経済が経済体制としてどのような特質を有しているかを確定することも試みられていないのである。筆者の立場からすればコルナイの移行経済の現状分析は中途半端かつ不完全であると言わざるをえない。

VI 筆者の移行経済論

筆者は、この数年来、(東)ドイツと中欧諸国(ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー)を対象にして移行経済の体制的特質と体制移行の進捗状況を把握す

45) Keren[13]pp. 56-70

46) Kornai[20]p. 30. []内は筆者の挿入。

る作業に従事してきた⁴⁷⁾。筆者の現在の考えを述べておこう。

一般的かつ抽象的に考えると、移行経済はある経済体制から他の異質の経済体制への移行期に登場する経済である。したがって時間的に先行する経済体制の下降運動と後発の経済体制の上昇運動がクロスする時期のきわめて運動性に富む経済である。また旧経済体制と新経済体制が重なるという意味での混合経済であるとも言える。

コルナイはポスト社会主義諸国における移行経済の体制特質を混合経済と捉えた⁴⁸⁾。混合経済についてコルナイに説明はないが、かれの論法に従って推理すると上述の図1と図2が重なり合った経済、より正確に言うとも国有と私有、官僚的調整と市場的調整が混在している経済になるだろう(政治システムは東欧革命によって非共産党政権になっている)。しかし、これだけのことであればほとんど何も言わなかったことに等しい。20世紀末の移行経済はどのような体制的特質を有するか。経済体制研究者はまさにこの問いに対し明確に答える義務がある。

移行経済は時間の経過とともに絶えず変化する経済である。したがってその特質を捉えようとすれば時間を座標軸に据えたシステム・ダイナミックスの視点をもたなければならない。

(東)ドイツおよび中欧諸国について東欧革命以後の動きを観察すると、この地域の移行経済は時間的に二つの段階をたどってきたことが分かる。1990年代初期の第一段階と1992年－1994年以降の第二段階(その始点は国によって異なる)である。第一段階は東欧革命後に始まる。中欧各国で非共産党政権が登場するとEUに範をとった誘導資本主義への移行が開始されたが、その経路は二つあった。管理社会主義からの道と市場社会主義からの道である。前者の道をたどったのは(東)ドイツ、ポーランド、チェコおよびスロヴァキアであり、後者の道をたどったのはハンガリーであった。

管理社会主義から誘導資本主義への道をたどった国ではただちに中央管理経済と指令方式が廃棄され、市場経済と誘導方式が制度化された。問題は国有企

47) 福田[9]を参照されたい。なお、本稿ではこの文献で主張したことを一部修正している。

48) Kornai[16]p. 579

業の私有化であった。たとえば(東)ドイツには約8500、チェコ・スロヴァキアには約6000もの大・中国有企業が存在していたが、これらを一夜にして私有化するのには困難であり、その結果第一段階および第二段階を通して国有と私有が併存した。より正確に言うとも時間の経過とともに国有の占める割合が減少し、私有の占める割合が増加するという運動の形をとって併存した。第一段階では国有の占める割合が大きかったために「プレーキ効果」が働き、そのために市場経済の機能が阻害され、また市場経済および誘導方式も内実を伴わなかったために機能面および意味面の凝集力がきわめて低かった。つまり第一段階の移行経済は「機能的にも意味的にももっとも弱い連結」であった。各国で二桁のマイナス成長という猛烈な移行リセッションが発生したのはこのためである。

私有化政策の進捗によって私有セクターの占める割合が増加するにつれて各国の経済状態は次第に改善され、GDP成長率もプラスに転じた。(東)ドイツは1992年に7.3%、ポーランドは1992年に2.6%、チェコは1993年に0.3%、スロヴァキアは1994年に4.9%、ハンガリーは1994年に2.9%を記録した。GDPがプラス成長に転じた時点で各国の移行経済は第二段階に移った。この段階になると私有化の進展につれて機能連関および意味連関とも凝集力が高まり、移行経済の安定度が増したが、所有の面で私有が支配的な地位を占めるに至らなかったで第二段階の移行経済は依然として「機能的にも意味的にも弱い結合」に留まった。

(東)ドイツは1994年末に、チェコは1996年の年央に国有企業の私有化を完了し、両国では私有が支配するところとなった。したがって形式からすると両国は移行経済の段階を通過し、誘導資本主義へ移行したことになる。私有、市場経済および誘導の組み合わせが実現されたからである。しかしそれはまだ内実を備えていないので——たとえば私有化にはまだ所有権が私人に移転した企業における私的営利会社化つまりリストラクチャリングの課題が残されている——名実ともに「機能的にも意味的にも強い連結」になったとは言えない。実質的に先進諸国並の誘導資本主義に到達するにはまだかなりの時間を必要とするだろう。今はさしあたり、(東)ドイツとチェコは誘導資本主義の第一段階を歩み始めたとしておこ

う。(東)ドイツは先進誘導資本主義の西ドイツに吸収されたのでチェコよりも一足早く第一段階を通過するであろう。

中欧の中で特異な道をたどったのはハンガリーである。この国では市場社会主義の時代(1968年-1989年)に市場経済と誘導方式が——不完全ではあったが、少なくとも形式上は——制度化されていた。したがって東欧革命以後のアンタル政権は国有企業の私有化に集中すればよかったのだが、その主たる方法が時間浪費的な資本私有化(capital privatization)に置かれたために、私有化のテンポが予想以上に遅れてしまった。このため国有+私有(国有>私有)、市場経済および誘導の組み合わせから成る移行経済の第一段階が予想外に長引いた。このためハンガリー経済も移行リセッションに見舞われ(1991年のGDP成長率はマイナス11.9%)、それがようやくプラス成長に転じたのは1994年である(GDP成長率2.9%)。この時点からハンガリーの移行経済は第二段階に入ったのであるが、その後政府が私有化のスピードアップを図り、先進国の投資家に対する国有企業の売却を促進した結果、1997年末には予定していた私有化が完了した。ハンガリー経済も移行経済の段階を通過し形式的には誘導資本主義へ移行した。(東)ドイツおよびチェコと同様に誘導資本主義の第一段階を歩み始めたのである。

要約しておこう。移行経済は所有の面で国有と私有が併存した混合経済である。その移行経済は中欧諸国では第一段階と第二段階を通過してきた(ただしポーランドとスロヴァキアはまだ移行経済の第二段階にある)。第一段階の移行経済は、国有が支配的であるため「機能的にも意味的にももっとも弱い連結」という体制特質を有している。各国の経済成長率がプラスに転じた時点で移行経済は第二段階に進む。この段階では国有よりも私有の占める割合の方が次第に大きくなり、システムの安定性が増すが、しかしなお私有が支配的ではないために第二段階の移行経済は「機能的にも意味的にも弱い連結」の特質を帯びている。私有化が完了し、形式的に私有、市場経済、誘導の組み合わせが成立すると、移行経済の段階が終了し、誘導資本主義の第一段階が始まる。東ドイツ、チェコ、ハンガリーがすでにこの段階に歩を進めている。

VII おわりに

レボヴィッツ (M. A. Lebowitz) は最近書いた論文の中で次のように述べている。「ヤーノシュ・コルナイが『現存社会主義』に関するその業績でノーベル経済学賞を貰っていないのは驚きだ⁴⁹⁾」。コルナイは社会主義の経済学的研究では世界の第一人者であり、レボヴィッツの言うようにノーベル経済学賞を貰ってもおかしくない業績を残している。コルナイは東欧の改革経済学 (reform economics) の第一世代に属し、すでに1950年代からポーランドのブルス (W. Brus) やチェコスロヴァキアのシク (O. Sik) やソ連のリーベルマン (E. Liberman) らとともに改革派の旗手として活躍した。コルナイは早くからメインストリームの経済学である新古典派のパラダイムを取り入れ、古典的社会主義に関する独特の経済学 (不足の経済学) を打ち立てた。また、彼は鋭敏な感性で時代の流れを読み、時流にうまく乗って人を引きつける学説や政策案を次々に発表した。ソ連・東欧における経済学界のオピニオン・リーダーになり、経済学者番付の最上位に名を連ねる実力者となった。ドイツの経済学者ワゲナー (H.-J. Wagener) のアンケート調査によると、チェコ、ハンガリー、ロシアでトップの人気を博した⁵⁰⁾。

コルナイは、現存社会主義の崩壊とともに忘れ去られていった学者が多い中であって現在もなおハンガリーから世界に発信し続けている息の長い学者である。その息の長さを支えているのは、世界と交信できる新古典派のパラダイムと時流に乗る才能を身につけていることのほかに、その時々流行っている学説をいち早く取りこめる能力を併せもっていることであろう。コルナイは次のように述べている。「私はこれまでと同じように半分はメインストリームの中にいて半分はその外にいる⁵¹⁾」、「私はケインジアンでもマネタリストでもないし、他の学派の唱道者でもない。必要なことはよく知られた諸理論の総合化であり、さらに理論的イノベーションである⁵²⁾」。メインストリームのパラダイムをベ-

49) Lebowitz [21] p. 377

50) Wagener [22] p. 171

51) Kornai [19] p. xiii

52) Kornai [19] p. 81

スにして流行りの諸理論を取り込む、これがコルナイの方法論的スタンスである。上述した実証的政治経済学の方法はこのようなスタンスから生まれたのである。

コルナイは信念の人ではない。マルクスやハイエクのように個性が強烈で自己の思想にあくまでも忠実な原理主義者ではない。むしろプラグマティストである。それはたとえば次のような発言に端的に示されている。「私は資本主義経済に幻想をもっていない。幻想なしに資本主義は社会主義よりも優れていると考えている。より生産的だし、より福祉があるし、より自由である⁵³⁾」,「89-90年の転換点の真の意義は社会主義が[資本主義との生産性]レースに敗れたところにある⁵⁴⁾」。コルナイの体制選択の基準はイデオロギーではなく効率や生産性などのプラグマティックな基準である。コルナイがかつて市場社会主義を支持したのもこのような考えからであった。効率・生産性基準からすれば古典的社会主義よりも市場社会主義の方がベターであると考えたのである。シクやホルバートも市場社会主義を支持したが、かれらはデモクラティック・マルキシストであり、道を説く人であった。それだけに市場社会主義の崩壊とともに影響力を失ってしまったのである。

コルナイはプラグマティストだけに理想を説かない。彼に理想的経済体制論はない。コルナイに物足りなさを感じるのは筆者だけであろうか。といってコルナイ説に魅力がないと言うのではない。現存社会主義の経済学的分析や体制移行の政治経済学的分析などの実証的分析(positive analysis)は迫力があり、説得力があり、文句なしに一級品である。本稿で取り上げたゆえんである。

筆者は、この十年来、コルナイ説を絶えず意識しつつ体制移行の問題に取り組んできた。大袈裟に言えば筆者の形態論的方法がコルナイの実証的政治経済学的方法に対してどこまで太刀打ちできるか試してきた。本稿はその報告書の一章を成すものである。残りの章は次の機会に書くことにしたい。

53) Kornai[19]p. xii

54) Kornai[20]p. 38. []内は筆者の挿入。

引用文献および参考文献

- [1] Arrow, K.J., Economic Transition, Speed and Scope, in *Journal of Institutional and Theoretical Economics*, Vol.156, 2000, pp.9-18.
- [2] Bossanyi, K., An Interview with János Kornai, in *Acta Oeconomica*, Vol.42(3-4), 1990, pp.315-328.
- [3] 福田敏浩『体制転換の経済政策—社会主義から資本主義へ—』, 晃洋書房, 1996年.
- [4] 福田敏浩「私有化に関する政策提言」, 『彦根論叢』, 第299号, 1996年, pp.105-120.
- [5] 福田敏浩「経済体制の移行に関する戦略論」, 『滋賀大学経済学部研究年報』, 第3巻, 1996年, pp.1-15.
- [6] 福田敏浩「体制移行の経済学—形態論的アプローチ—」, 『彦根論叢』, 第305号, 1997年, pp.49-67.
- [7] 福田敏浩「経済体制研究再考」, 『滋賀大学経済学部研究年報』, 第4巻, 1997年, pp.1-17.
- [8] 福田敏浩「移行経済の研究—理論と政策—」, 滋賀大学経済学部研究叢書第28号, 1997年.
- [9] 福田敏浩「移行経済のセカンド・ステージ」, 『彦根論叢』, 第315号, 1998年, pp.67-81.
- [10] 福田敏浩「移行期の経済体制論」, 『滋賀大学経済学部研究年報』, 第5巻, 1998年, pp.1-19.
- [11] Horvat, B., What is a Socialist Market Economy?, in *Acta Oeconomica*, Vol.40(3-4), 1989, pp.232-235.
- [12] Horvat, B., Socialism as Socio-economic System, in Dopfer, K., K.-F.Raible (eds.), *The Evolution of Economic Systems, Essays in Honour of Ota Sik*, London, 1990, pp.186-192.
- [13] Keren, M., Why a 'Big Bang' is better, in Brezinski, H., et al. (eds.), *The Microeconomics of Transformation and Growth*, Cheltenham-Northampton, 1998, pp.56-75.
- [14] J. コルナイ, 盛田常夫編訳「経済改革の可能性—ハンガリーの経験と展望—」, 岩波書店, 1986年.
- [15] Kornai, J., The Affinity between Ownership and Coordination Mechanisms, The Common Experience of Reform in Socialist Countries, in Bogomolov, O.T. (ed.), *Market Forces in Planned Economies*, London, 1990, pp.32-54.
- [16] Kornai, J., *The Socialist System, The Political Economy of Communism*,

Princeton, 1992.

- [17] Kornai, J., The Principles of Privatization in Eastern Europe, in Poznanski, K.Z. (ed.), *The Evolutionary Transition to Capitalism*, Boulder·San Francisco·Oxford, 1995, pp.31-56.
- [18] Kornai, J., *Highway and Byways, Studies on Reform and Post-Communist Transition*, Cambridge·London, 1995.
- [19] Kornai, J., *Struggle and Hope, Essays on Stabilization and Reform in a Post-Socialist Economy*, Cheltenham·Northampton, 1997.
- [20] Kornai, J., What the Change of System From Socialism to Capitalism Does and Does Not Mean, in *Journal of Economic Perspectives*, Vol.14, No.1, 2000, pp.27-42.
- [21] Lebowitz, M.A., Kornai and the vanguard mode of production, in *Cambridge Journal of Economics*, 24, 2000, pp.377-392.
- [22] Wagener, H.-J., Second Thoughts?, Economics and Economists under Socialism, in *Kyklos*, Vol.50, Fasc.2, 1997, pp.165-187.